

明和町で野鳥から鳥インフル

オオタカ1羽、簡易検査陽性

県は十四日、明和町内で死んでいた野鳥のオオタカ1羽に対する簡易検査で、A型鳥インフルエンザウイルスの陽性反応が出たと発表した。より毒性の強い高病原性鳥インフルエンザに感染しているかを調べる検査を鳥取大に依頼している。高病原性の感染が確認されれば、県内では紀宝町と南伊勢町で約三十万羽が殺処分された平成二十三年以来となる。

県は感染拡大を防ぐため、現場から半径三キロ内の養鶏場一軒を消石灰で消毒した。この養鶏場の鶏に異常はないという。環境省の指針に基づき現場から半径十キロ内の同町、津市、松阪市、玉城町、伊勢市の一部を野鳥監視重点区域に指定し、監視を強化する。

簡易検査を実施したのは今シーズンに入って十六例目だが、陽性反応は初めて。死んだオオタカが見つかった現場の周辺では十二日ごろから、このオオタカとみ

られる野鳥が弱っているのが目撃されていたという。オオタカは県のレッドデータブックで絶滅危惧種に指定されている。通常は半径数キロの縄張りを移動する

環境省チーム、愛知で調査

県によると、十四日午前九時半ごろ、車庫の屋根で死んでいたオオタカを見つ

けた住民が県に通報。県南勢家畜保健衛生所の簡易検査でA型の陽性反応が出た。鳥取大に検体を送付し、結果が出るには一週間ほどかかる見通し。

県は感染拡大を防ぐため、現場から半径三キロ内の養鶏場一軒を消石灰で消毒した。この養鶏場の鶏に異常はないという。環境省の指針に基づき現場から半径十キロ内の同町、津市、松阪市、玉城町、伊勢市の一部を野鳥監視重点区域に指定し、監視を強化する。

名古屋市の東山動植物園のкокクチョウなどが高病原性の鳥インフルエンザウイルス(H5N6型)に感染したことを受け、環境省は14日、専門家の緊急調査チームを愛知県に派遣し、周辺地域の野鳥に異常がない

か監視活動を始めた。チームは、環境省の委託を受けた財団法人「自然環境研究センター」の職員や大学教授らで構成。14日はセンター職員2人が、名古屋城を囲む堀や周辺に飛来し、感染を広げる恐れのあるキングクロハシロなどの渡り鳥を双眼鏡で観察、1羽ずつ記録に残した。この日は、大量死や、異常な行動をする野鳥は見つからなかったという。

チームは18日まで、同園から半径10キロ圏にある十数カ所の池などを調査。県職員に野鳥の監視方法を助言するほか、東山動植物園も

ため、県は付近に飛来した渡り鳥から感染した可能性が高いと推定。「死んだ鳥を見つけた時には触らず県に通報してほしい」と呼び掛けている。

農場発生時に備える

鈴木英敬知事の話 簡易検査のため確定したわけではないが、県内の野鳥で鳥インフルエンザウイルスが確認され、残念な結果となった。農場で発生した場合に備えて準備することも、発生時は迅速に防疫措置を取って早期の収束に努める。(海住真之)

訪れ、防疫態勢を確認する。一方、東山動植物園は14日、新たに絶滅危惧種で雄のシジュウカラガン1羽が死んだと発表した。簡易検査では陽性だった。園では、別のシジュウカラガン1羽を含め7羽の感染が確定している。生きていたガンは残り1羽となった。3日に死んだ雄のコシロヤマドリ1羽の死因が心不全だったことも判明。ヤマドリは既に感染が分かった鳥がいた池とは別のケージ内で飼育しており、動物園は「感染は広がっていない」との認識を示した。